空海の立体曼荼羅 21 体

曼荼羅とは、佛教の神々とシンボルが悟りに向かうみちを描くように配置された宇宙をシンボルで描いたものである。講堂の像は、立体的な曼荼羅として、空海によって配置された。21 体のうち、15 体は 9 世紀初頭のもので、残りの 6 体は 1486 年の火災で焼失した像を復元したものである。大日如来像は 1497 年に再建されたもので、他の 5 体は江戸時代に再建されたものである。
曼荼羅の中央には五智如来が配置され、さらにその五智如来の中心には、原始または宇宙の佛である大日如来が配置されている。両脇には東の五大菩薩と西の五大明王が配置されており、四方を守護する四天王と、東と西の端にそれぞれ 1 つずつ守護の神がいる。

五智如来

如来は日本の佛教の神々で最高位を占める存在である。須弥壇の中央の五体の仏陀は生物が輪廻から解脱するのを助ける 5 つの基本的な知恵を具現化している。それらの中央には、原始または宇宙の佛である大日如来が配置され、真言宗やその他の密教において特別な徳があるとされる存在である。

大日如来（中央）
阿閦如来（北東）
宝生如来（南東）
阿弥陀如来（南西）
不空成就如来（北西）

五大菩薩

菩薩は他者を涅槃へと導くために、自らの悟りを開くことを遅らせることで、この世にとどまった慈悲深い存在である。ここの五大菩薩は、密教の基礎となる経典である金剛界曼荼羅に現れる姿と同様の形で存在している。一体ずつ五智如来と結び付けられている。

金剛波羅蜜菩薩（中央）

金剛薩埵菩薩（北東）
金剛宝菩薩（南東）
金剛法菩薩（南西）
金剛業菩薩（北西）

五大明王
明王は、邪悪な者を懲らしめ、忠実な者を導くことで佛教を守る。明王は炎に囲まれて描かれており、その炎は物欲を燃やして消し去ることによる心の浄化を意味している。明王の恐ろしい見た目は優しそうに見える菩薩と対照的だが、明王は生物が悟りの境地に到達できるように彼らを守り、導く。菩薩のようにここの明王も一体ずつ五智如来と対になっている。

不動明王（中央）
金剛夜叉明王（北東）
降三世明王（南東）
軍荼利明王（南西）
大威徳明王（北西）

四天王
極めて重要な４つの方角の守護神たちは佛教の守護神たちで、多くの場合、戦士として描かれている。彼らは邪悪な存在を倒し、佛教の敵と戦うために槍と剣を持っており、倒した悪魔の上に立っている。これらの王の１人である多聞天は武器に加え、塔を持っている。

多門天（北東の角）
持国天（南東の角）
増長天（南西の角）
広目天（北西の角）

梵天と帝釈天

この 2 種類の神々は多くの場合、ペアで登場し、釈迦如来の守護神として考えられている。両方ともヒンドゥー教の強力な神々が発現したもので、梵天は Brahma（婆羅門）、帝釈天は Indra（因陀羅）と関連付けられる。佛教芸術においては、主要な神と 3 対でセットとなって、その両端に描かれる。梵天は須弥壇の東側、帝釈天は西側に位置づけられる。

梵天（東側）
帝釈天（西側）